たは狭窄，2) 側副路の発達，3) 静脈内 RI 停留，4) 表在静脈の描出について検討した．1)，2) の所見がそろえば DVT と診断可能だが，それ以外の所見は正常ボランティアでも認められることがあり，あまり特異的な所見ではなかった．

9. 小児アランチウス静脈管開存症の診断および治療効果判定における ^{123}I-IMP 経直腸門脈シンチの有用性

吉良　朋広　　冨口　静二　　吉良　光子
大山　洋一　　高橋　睦正　　（熊本大・放）
池田　信二　　内野信一郎　　（同・小児外）

目的：アランチウス静脈管開存症は小児でまれに認められる疾患である．その診断は超音波にて静脈管の開存を確認すれば可能であるが，短絡の程度について知る方法はいまだ確立されていない．今回われわれはアランチウス静脈管開存症の3例を経験したので，これに正常と考えられた3症例を加え報告する．

対象および方法：対象は1995年1月から12月まで熊本大学放射線科にて門脈大静脈シャントが疑われ ^{123}I-IMP 経直腸門脈シンチを施行した3例．年齢1–5歳 (平均3.0歳)，男性2例，女性1例，全例アランチウス静脈管開存症であった．正常対照3例は全例男性，年齢0–5歳 (平均2.0歳)．装置は東芝製ガンマカメラ GMS7200 である．方法は ^{123}I-IMP 37 MBq を経直腸的に投与し前面像にて1フレーム1分間で30分間のダイナミックデータを収集した．投与後25から30分の512×512マトリックスの5分間の static 画像データを用い，肝と肺の関心領域のカウントを縦隔をバックグラウンドとして補正し，シャント率＝補正後肺カウント／(補正後肺カウント＋補正後肝カウント) でシャント率を算出した．また手術の行われた3例については術後にも検査を行った．

結果：アランチウス静脈管開存症の3例はいずれも50%以上のシャント率 (平均65.1%)を認めた．アランチウス静脈管開存のない3例のシャント率は平均6.3±1.9%であった．手術を施行した3例については症例1は手術後シャント率7.3%に低下し，症例2は4.1%，症例3は22.7%に低下した．

結論：^{123}I-IMP 経直腸門脈シンチはアランチウス静脈管開存症の診断および治療効果判定に有用であった．^{123}I-IMP 経直腸門脈シンチは侵襲が少なく本症のような小児の門脈大循環短絡の評価に有用と思われる．

10. 無痛性甲状腺炎における甲状腺シンチグラフィについて

桂木　　誠　　筒井　竹人　　荒木　昭輝
船津　和宏　　木村　史郎　　清水健太朗
境　　文孝　　西原　春實
（聖マリア病院・画像診断部）
布井　清秀　　（同・糖尿病内）

無痛性甲状腺炎4例のシンチグラフィについて報告する．1例は出産後である．いずれも甲状腺機能亢進の症状を有し，血中のホルモンレベルが上昇していたため，甲状腺機能亢進症との鑑別が問題となった例である．

^{123}I NaI による甲状腺シンチグラフィではヨードの摂取が著明に低下していた．機能亢進の症状は甲状腺から血中への一過性ホルモン逸脱によるものと考えられた．真のバセドウ病と炎症による機能亢進との鑑別に甲状腺シンチグラフィは有用であると思われた．

11. 副腎癌による原発性アルドステロン症の一例

小林　正和　　土持　進作　　谷　　淳至
中別府良昭　　中條　政敬　（鹿児島大・放）

副腎癌による原発性アルドステロン症の稀な一例を報告した．症例は39歳，男性．人間ドックにて右副腎腫瘍を指摘され精査目的で当科入院となった．高血圧，血漿アルドステロン値の上昇と血中レニン活性の低下を認めたが，その他のホルモン値は正常範囲内であった．CT，超音波，MRI ではこの腫瘍は10×7 cm 大で内部に壊死巣を有していた．副腎皮質シンチでは右副腎腫瘍は欠損像を呈し，左副腎は描出された．右副腎動脈造影で腫瘍血管の増生と tumor stain を認め，静脈血サンプリングでは右副腎静脈は対側に比しアルドステロン値が高値を示した．以上より副腎癌を疑ったが，手術による摘出標本の組織診断でも副腎皮質癌であった．術後血漿アルドステロン値は正常化した．

Presented by Medical*Online